

## 黙示録14章「敵のただ中で治める方」

### 1A 子羊に贖われた初穂 1-5

1B 子羊の前で歌う十四万四千人 1-3

2B 汚れなき童貞 4-5

### 2A 世に対する神の裁き 6-13

1B 永遠の福音 6-7

2B 淫行を行わせるバビロン 8

3B 苦しみを受ける獣の住民 9-11

4B 主にあって死ぬ幸い 12-13

### 3A 主の刈り取り 14-20

1B 穀物の実り 14-16

2B ぶどうの踏みつけ 17-20

1C すでに熟したぶどう 17-18

2C 踏み場から流れる血 19-20

## 本文

黙示録 14 章を開いてください。私たちは、12 章から始まる、竜による、神の民とされた者たちに対する大いなる戦いを見えています。イスラエルの民が竜に追われるも、彼らは守られます。そこで、イエスの証しを保っている者たちに戦うために、竜が獣に自分の力を与えました。獣は、神と天に住む者たちを冒瀆し、地上の聖徒たちを殺していきます。獣の像を地上のすべての人々に拝ませ、獣の刻印を受けさせます。それを拒む者たちは殺され、また売り買いができないようにされます。

しかし、黙示録は、いや、聖書全体は、神の勝利の証しです。悪魔がいかに暴れようとも、まったく動かされることなく、神のご計画はそのとおりになります。そしてかえって、悪魔の支配する世に対して、主が正しい裁きを行われるのです。13 章の獣の国が、いかにその支配が強かろうが、圧倒的な支配力で、子羊が打ち勝っていることを 14 章は教えています。

### 1A 子羊に贖われた初穂 1-5

1B 子羊の前で歌う十四万四千人 1-3

<sup>1</sup> また私は見た。すると見よ、子羊がシオンの山の上に立っていた。また、子羊とともに十四万四千人の人たちがいて、その額には子羊の名と、子羊の父の名が記されていた。

黙示録で、私たちの主が「子羊」と呼ばれています。これは、私たちを愛し、私たちのために血を流して罪から解放してくださったことを示す言葉です。そして、この方が「シオンの山の上に立つ

ていた」とあります。これは、主がすでに地上に戻ってこられて、エルサレムの山に立っておられることを示しています。苦しみを受けている聖徒たちにとって、主は御座におられることを知ることほど、慰められることはないでしょう。

そして、「子羊とともに十四万四千人の人たち」がいます。これは、7章に出てきた、イスラエル十二部族の、神のしもべたちです。彼らが、9章における、さそりの毒を持つ、いなごのような軍隊に対して、害を受けないで守られていることが書かれていました。彼らは、獣が世界を牛耳っている時も、全く害を受けるはありません。再び来られた主がシオンの山に立っておられる時に、ともにそこにいるのです。思い出すが、ダニエルの三人の友人です。彼らも、主にある者たちとして、金の像の拝礼命令に屈しませんでした。それで、彼らは火の中に投げ入れられても、全く害を受けませんでした。

ここで強調されているのは、彼らに名が記されていることです。「その額には子羊の名と、子羊の父の名が記されていた」とあります。獣の数字の刻印を、地上に住民が押されるのですが、それは彼らが獣のものになっていることを示していました。しかし、彼らは子羊の名が記されています。そして子羊と父なる神は一つですから、父なる神の御名も記されているのです。そのことに基づいて、彼らは一図に主に自分たち自身を献げていたのです。同じように、聖霊によって証印が押されている私たちも、主の御名が自分たちに記されています。

<sup>2</sup> また、私は天からの声を聞いた。それは大水のとどろきのようであり、激しい雷鳴のようでもあった。しかも、私が聞いたその声は、豎琴を弾く人たちが豎琴に合わせて歌う声のようであった。

「天からの声」です。今、子羊がシオンの山に立っておられるのですが、天から降りて来られた時、天自体も地に近づいています。それは、ちょうど、シナイ山に主が降りてこられた時のようです。主が降りて来られると、天にあるものが雷鳴や雷と共に降りてこられたのと同じです。イエスがヨハネに現れた時に、「その声は大水のとどろきのようであった」とありました(1:15)。

そしてその声が、「豎琴を弾く人たちが豎琴に合わせて歌う声のよう」とあります。豎琴と言えば、ダビデが少年の時から弾いていた楽器です。詩篇には、豎琴をもって主をほめたたえることが勧められています(144:9等)。そして、神殿での礼拝に、豎琴をも含めた主への賛美を導入させています。「1歴代 15:16 ダビデはレビ人の長たちに命じて、彼らの同族の者たちを歌い手として任命し、琴、豎琴、シンバルなどの楽器を手に、喜びの声をあげるようにさせた。」なぜ、豎琴を弾かせているのか？それは、天の音色だからです。主が御霊によって、ダビデに神殿礼拝に豎琴を導入させ、それは天においてなされていることを、地上の神殿でも行わせたに他なりません。

<sup>3</sup> 彼らは御座の前と、四つの生き物および長老たちの前で、新しい歌を歌った。しかし、地上から

贖われた十四万四千人のほかは、この歌を学ぶことができなかった。

天の神の御座にいるのが、これら四つの生き物と長老たちでした。つまり、今、天が降りて来て、彼らのところに御座が置かれているのです。天が地に近づいたのです。そして、「新しい歌」ですが、これは主との親しい関係、新たにされる関係を表しています。「詩 33:1-3 正しい者たち【主】を喜び歌え。賛美は直ぐな人たちにふさわしい。2 豎琴に合わせて【主】に感謝せよ。十弦の琴に合わせてほめ歌を歌え。3 新しい歌を主に歌え。喜びの叫びとともに巧みに弦をかき鳴らせ。」私たちは、このようにして、賛美によって、内なる人が新たにされていく体験をしていきます。

しかも、「地上から贖われた十四万四千人のほかは、この歌を学ぶことができなかった」とあります。彼らが主と持っているような関係があって、歌うことができる特別な歌のようです。私たちは、彼らのような十四万四千人ではありませんが、しかし、主のものとされている者たちには、特別な関係があり、特別な歌があるということです。

## 2B 汚れなき童貞 4-5

<sup>4</sup> この人たちは、女に触れて汚れたことがない者たちで、童貞である。彼らは、子羊が行く所、どこにでもついて行く。彼らは、神と子羊に献げられる初穂として、人々の中から贖い出されたのである。

ここの「童貞」は、十四万四千人の人たちが子羊に対して、すべてが献げられていたことを示しています。シナイの山で、聖なる神の前に出る時に、三日間、女に触れてはいけないとイスラエル人は命じられていました。妻を知ることはもちろん良いことなのですが、主の前に出るという特別の時に、触れないように命じられました。

それだけではありません。シオンが建て直されるにあたって、彼らはその象徴的存在です。純潔についての比喻は、例えば、イザヤ書 37 章 22 節に、「処女である娘シオン」とイスラエルが表現されています。シオンそのものが、他の偶像礼拝などに汚されていないことを示しています。しかし患難時代、11 章で、エルサレムがソドムとかエジプトとか呼ばれたことを思い出してください(8 節)。けれども、今、シオンは清められ、その純潔さを取り戻しています。

そして、「子羊が行く所、どこにでもついて行く。」と言っていますね。これは、彼らが主に対して忠実であることを示しています。イエスが弟子たちに言われていたことを実践しています。「ヨハ 12:26 わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいるところに、わたしに仕える者もいることとなります。わたしに仕えるなら、父はその人を重んじてくださいます。」

そして、「神と子羊に献げられる初穂」とあります。「初穂」は、レビ記 23 章に出てくる言葉です。

「初穂の祭り」というものが、過越の祭りの三日目に行なわれます。大麦の収穫があるとき、初めに主におささげするというのが、その主旨です。贖われた者の初穂ということは、これから 14 万 4 千人のようにして、患難の中で数多くの人たちが同じように贖われるという意味です。12 章で、イスラエルの残りの民が、荒野に逃げるとありました。彼らの中から贖われる者たちが出て来て、イスラエルは、最後は、みな救われることになります。また、患難時代に殉教した異邦人たちも、最後にはよみがえって、贖い出されます。

そしてとても興味深いのですが、「子羊に献げられる」とあります。子羊こそが、神に対するいけにえなのですが、そのいけにえになられた方のものとなった者たちも、この方に自分自身を献げるのです。キリスト者の献身は、まさにこれです。「ロマ 12:1 ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」

<sup>5</sup> 彼らの口には偽りが見出されなかった。彼らは傷のない者たちである。

彼らは、その告白において、偽りがありませんでした。イエスを主としているのであれば、獣の像を拝むようなことはしませんでした。告白と行いが矛盾していなかったのです。偽善ではなかったのです。そして、「傷のない者」とありますが、これは主の前で献げるいけにえが、傷のないものでなければいけないという教えから来ています。足が骨折している羊は、主は受け入れられません。傷や欠陥があってはならないのです。キリスト者は、傷のない子羊の血によって、贖われたことが第一ペテロ 1 章 19 節に書かれています。

ですから、主の口に偽りがなく、傷のない方なのですが、この方の名が記されていて、この方のものになっている者たちも、同じように口に偽りがなく、傷がなかったということです。私たちは、これが目標です。もちろん、今も不完全です。けれども、主にあって完全な者とされた者たちは、その完成を強く願って、求めていくのです。パウロがこう祈りました。「I テサ 3:13 そして、あなたがたの心を強めて、私たちの主イエスをご自分のすべての聖徒たちとともに来られるときに、私たちの父である神の御前で、聖であり、責められるところのない者としてくださいますように。アーメン。」

## **2A 世に対する神の裁き 6-13**

このようにして、獣の支配に全く影響されないかたちで、十四万四千人がこれから贖われる者たちの初穂として立てられます。そして、主は獣の国に対して、究極の裁きを行われます。獣の国において、その像を拝まない者たちに対する仕打ちは過酷です。しかし、それ以上に、はるかに獣の刻印を受けることのほうが、もっともっと恐ろしいのです。私たちは、「救われる」という言葉を使いますが、そもそも、何から救われているのか？ということをお出ししてみたいと思います。

## 1B 永遠の福音 6-7

<sup>6</sup> また私は、もう一人の御使いが中天を飛ぶのを見た。彼は地に住む人々、すなわち、あらゆる国民、部族、言語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。

御使いが「中天」を飛んでいます。この御使いは、なんと「永遠の福音」を携えていると言っています。主が、患難期の後半にあたって、最後の機会を地上に住むあらゆる人々に与えておられるのです。なぜ御使いなのか？一つに、主の証しをする人が極限にまで少なくされているということでしょう。教会は携挙され、地上で主を信じる聖徒たちは殉教します。それでも主は、御使いを遣わして福音を伝えさせるのです。「マタ 24:14 御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。」とイエスが言われました。主がそのただ一人さえ、悔い改める者がいるのであれば滅びから免れさせたいと願われている、その憐れみの心がここにあります。

<sup>7</sup> 彼は大声で言った。「神を恐れよ。神に栄光を帰せよ。神のさばきの時が来たからだ。天と地と海と水の源を創造した方を礼拝せよ。」

この「永遠の福音」には、私たちが知っている、主イエス・キリストが罪のために十字架で死なれ、三日目によみがえられた、という内容が入っていません。しかし、すべての前提になる、根本的な呼びかけが入っています。神を畏れ、神に栄光を帰すること、そして礼拝することです。神がおられることを認めなければ、大前提として福音が成り立ちません。

そして、この神が「天と地と海と水の源を創造した方」であるということです。獣の国において、像を拝むという偶像礼拝をさせられています。その前には、9 章ですが、悪霊どもの災いによって人々が苦しみ、人口の三分の一が殺されています。それに関わらず、偶像礼拝から離れません。「9:20 これらの災害によって殺されなかった、人間の残りの者たちは、悔い改めて自分たちの手で造った物から離れるということをせず、悪霊どもや、金、銀、銅、石、木で造られた偶像、すなわち見ることも聞くことも歩くこともできないものを、拝み続けた。」

ですから、主は、彼らが頼りにしている、天地、海にあるもの、水の源を一部、断ち切って、それで創造した方を拝むように促しておられたのです。七つのラツパの災いの、最初の四つのラツパが、これら天地と海、水の源のそれぞれ三分の一に害を加えるものでしたね。

パウロが、ロマ書で福音を語る時に、初めに語ったのが、偶像礼拝の問題でした。1 章で、人々が、不義によって真理を阻んでいて、それは神の神性と永遠の力は、被造物に明らかに啓示されているのに、「神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなった。(21 節)」と言っています。そして、朽ちない神の栄光を、偶像に変えてしまったこと

を話しています。

## 2B 淫行を行わせるバビロン 8

<sup>8</sup>また、その御使いの後にもう一人、第二の御使いが来て言った。「倒れた、倒れた、大バビロンが。御怒りを招く淫行のぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませた都が。」

次の御使いが、次の神の裁きを宣言しました。バビロンの倒壊です。ここから、黙示録の中で大きなテーマになっていきます。16章の最後のところに、大バビロンが倒れることが再び書かれており、そして17章と18章にて、主はヨハネにバビロンの崩壊について啓示を与えておられます。その倒壊があって、天に大歓声が起き、それから19章で、主が地上に戻ってこられる場面になります。大バビロンの存在は靈的に非常に大きな意味を持っています。

17章と18章に、その姿が生々しく現れるので、そこに入ったら、じっくりと学んでいきたいと思えます。今、ここでは、偶像礼拝と経済についての関係です。偶像礼拝の問題については、17章で、王たちがバビロンという大淫婦と淫行を働いているという幻に現れています。18章では、莫大な富がバビロンに集められているところで、商業主義の姿として現れています。この女が、獣の上に乗っている姿が、17章に現れます。

偶像礼拝は、靈的な淫行として聖書で描かれています。そして事実、聖書の時代には、偶像礼拝の儀式に、忌まわしい性的な乱れがともなっています。ティアティラにある教会で、それが起こっていたのを思い出してください。イゼベルと呼ばれる女預言者が教会の中におり、「2:20 わたしのしもべたちを教えて惑わし、淫らなことを行わせ、偶像に献げた物を食べさせている。」とイエスは、明かしておられました。

ティアティラは、ギルドという商人たちの組合がありました。そこで、異教の儀式に関わるようなものがあり、そこで乱痴気騒ぎをします。それに関わらなければ、商売ができないという圧力がありました。それで、やっていいのだよと言っていたのが、この女預言者です。そして、性的逸脱と宗教が混ざっていて、しかも、それは経済的な保障のために行っていくのです。悔い改めなかったら、「大きな患難の中に投げ込む(2:22)」とイエスは言われました。まさに、バビロンの罪が教会の中に入っていたのです。このような背教の教会やその指導者は、たとえキリストの名を唱えていても、救われておらず、大患難の中に投げ込まれるのです。

そして、ラオディキアにある教会を思い出してください。イエスはご自身を彼らに表す時に、「神による創造の源である方(3:14)」と言われていました。なぜなら、彼らは「自分はまだ十分です、神を必要としていません。」という文化の中に生きていて、教会もそれに影響を受けていたからです。これが、今の時代の問題の根本でしょう。バビロンには、巨大な富があり、それによって、神をない

がしろにしていました。そして、キリスト者に対して圧迫していました。私たちは、絶えず、「神の命令を守らなくても、それとなく生きられる。」という圧迫を受けています。そして、すべての源が神なのに、それから離れるという偽りに入れられてしまいます。

ところで、「淫行のぶどう酒」を飲ませるといふ表現が出てきますね。これは、今、ティアテラの教会の背景になっているもので、ローマ社会では、イエスと弟子たちの過越の食事と同じように、横たわって食べる習慣がありました。ぶどう酒を飲んで酔いしれて、その床で淫行を働いていました。その姿をよく現しています。そして、ぶどう酒の杯を取るというのは、相手が差し出したものをすべて受け入れ、自分がその影響下に入るのを意味しています。そこに入っているものを、自分のものにするということで、聖書には「杯を受け取って、飲む」といふ表現が出てきます。

### 3B 苦しみを受ける獣の住民 9-11

<sup>9</sup> また、彼らの後にもう一人、第三の御使いがやって来て、大声で言った。「もしだれかが獣とその像を拝み、自分の額か手に刻印を受けるなら、<sup>10</sup> その者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた、神の憤りのぶどう酒を飲み、聖なる御使いたちと子羊の前で火と硫黄によって苦しめられる。

第二の御使いは、獣の国に対する神の激しい御怒りです。偶像礼拝と忌まわしい淫行、そして極度の富がバビロンの特徴です。17章を見ると、その最後に獣が他の王たちと共にバビロンを滅ぼします。獣がバビロンを支えていました。言い換えれば利用していたのです。バビロンも、獣を利用していました。けれども、獣はその関係に嫌気が差して、彼女を滅ぼします。それが17章の最後のほうに書いてあります。それから、獣が、あらゆる神々と呼ばれるものよりも自分を高くして、自分自身が像として拝まれる、完全な全体主義へと移行するのです。

獣の像を拝む者たちに対する厳しい裁きがここに書かれています。獣の像を拝まない聖徒たちは殺され、刻印を拒む聖徒たちは売り買いができず、餓死して死んだりするのでしょうか。しかし、刻印を受けることのほうが、死なないで生き残ったほうが、もっと悲惨です。ヘブル人への手紙11章に出てくる、モーセの生涯についての説明を思い出します。「11:25-26 はかない罪の楽しみにふけるよりも、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受ける辱めを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。それは、与えられる報いから目を離さなかったからでした。」今、受けている苦しみを、将来の富と天秤にかけたのです。これが分かれば、獣の刻印を受けることが、その場かぎりの判断では理にかなっているでしょうが、将来の苦しみを考えたら、最も愚かな判断だと言えるでしょう。

刻印を押されるのは、すべての住民に課せられることです。ですから、押されるのを拒むことには、大きな勇気と決断を要されますが、押されることについては何もしなければ押されるのです。多くの方は、こういったことを「私が選んだことではないのに」と言って、言い訳をします。あるいは、

「別に拝むつもりはないけれども、形だけ儀礼だ」という人たちもいます。そうやって、受動的に刻印を受けても、結果は、厳しい裁きなのです。「決断しないという決断」という言葉があります。自分が、流れにそのまま流されることも、列記とした選択であり、決断なのです。

そしてここに「神の憤りのぶどう酒」という言葉が出てきました。先ほど話したように、ぶどう酒の杯を受け取ることは、相手から受け取って、自分の身に入っていく、その影響下に入ることを意味します。ここでは、神の憤りをもろに受けるということです。詩篇には、こうあります。「75:8【主】の御手には杯があり混ぜ合わされた泡立つぶどう酒が満ちている。主がこれを注ぎ出されると実にすべて地の悪者どもはそれを飲みかすまで飲み干す。」

10 節の「混ぜ物なしに注がれた」とは、純度が高いということです。アルコールの純度が高く、酔いが回ることを表しています。さらに、「神の憤り」という言葉ですが、オルゲというギリシア語です。ギリシア語には、怒りを意味する言葉として「スモス」と「オルゲ」があります。スモスは、ちょうど裁判官が犯罪人に刑の執行を行なわなければいけない時のように、きわめて冷静に、合理的に考えて現わす怒りのことです。けれどもオルゲは、熱情のこもった「これでもかあ！」と叫ぶような怒りの現われです。新約聖書ではスモスがよく使われますが、この「神の憤り」は、オルゲが使われています。

そして、「聖なる御使いたちと子羊の前」とあります。恐ろしいです。彼らは、絶えず子羊を認めながら生きなければいけません。それがいかに聖なることかは、聖なる御使いがいることによって分かります。自分たちが、神の聖なる基準に照らし合わされて、それゆえに罪の定めと責めを絶えず意識しながら生きなければいけないのです。子羊が流した血によって、それが洗い清められるのに、そして聖なる神の前でも、白い衣を着て出ていくことができたのに、それを拒んだのですから、聖なる神の前で責めを負わないといけないのです。

「火と硫黄」というのは、ゲヘナのことです。イエス様が福音書でしばしば語られたゲヘナは、エルサレムのヒノムの谷のことを表してしまして。深く狭い谷底に、神殿で献げられたいけにえの老廃物など、いろいろなものが焼却されていました。それで、蛆がわいていて、火は消えないとイエスが言われたのは、聞いているユダヤ人たちには、かなりどぎつい言葉であり、生々しいものでした。そして、主が御怒りを現わす永遠のところは、このような神の火による裁きの場であることを示しているのです。

<sup>11</sup> 彼らの苦しみの煙は、世々限りなく立ち上る。獣とその像を拝む者たち、また、だれでも獣の名の刻印を受ける者には、昼も夜も安らぎがない。」

苦しみは「世々限りなく」続きます。そして、彼らは「昼も夜も安らぎが」ありません。地獄というも

のを少し考えてみましょう。地獄とは、聖なる神が人々に対して、「わたしの基準を満たすために、自分自身で贖いをしなければいけない。」と要求するところです。今私たちは、「神もキリストも要らないよ。自分で何とかやっていけるから。」という言葉聞きますが、実際に、そのような人たちの願いをかなえてあげられるところです。自分の行ないで神の基準に沿うように贖わせるところです。

けれども、もちろん、自分の行ないによって神の基準に達することはできません。その度に、自分を罪に定めなければいけません。「ああ、こういう良いことをしたつもりだったけれども、実に高慢であった。」など、自分が良いことを行なっているつもりが、聖なる神の前ではみな汚れた着物のようです。ですから、絶えず焦燥感の中で生きなければいけません。自分が神の基準に達成できないことに葛藤を覚えなければいけません。昼も夜も休みはないのです。いつまでも達成できませんから、永遠にこの苦しみは続くのです。

イエスは、「ヨハ 3:18 御子を信じる者はさばかれない。信じない者はすでにさばかっている。神のひとり子の名を信じなかったからである。」と言われましたが、今、この地上にいる間に、神の恵みによる救いと、無代価で与えられる永遠のいのちを拒み、生きていきたいのであれば、休みなき魂の中に留められるのです。

#### 4B 主にあつて死ぬ幸い 12-13

言い換えれば、主の前に自分自身を献げることは、魂に休息と安息を与えます。次に、その約束が、殉教した人々に与えられます。

<sup>12</sup> ここに、聖徒たち、すなわち神の戒めを守り、イエスに対する信仰を持ち続ける者たちの忍耐が必要である。

13 章で、獣の国で死んで行く時にも同じことを教えられていました。「13:10 捕らわれの身になるべき者は捕らわれ、剣で殺されるべき者は剣で殺される。ここに、聖徒たちの忍耐と信仰が必要である。」剣を取りたくなるのですが、主が剣をもって戦ってくださることを信じて、忍耐するのです。同じように、自分たちが殺される時、殺された後のことを考えて、信じて、忍耐しなさいということです。主は、弟子たちにこう励まされました。「ルカ 12:4-5 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。恐れなければならぬ方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」

<sup>13</sup> また私は、天からの声がこう言うのを聞いた。「書き記せ、『今から後、主にあつて死ぬ死者は幸いである』と。」御霊も言われる。「しかり。その人たちは、その労苦から解き放たれて安らぐことができる。彼らの行いが、彼らとともにいて行くからである。」

興味深いことに、天からの声があり、それから御霊が呼応して、語っておられます。三位一体の神の中で語っているように思われます。ここから、主にあって殉教することこそが幸いであることを強調しています。その後の恐ろしい神の憤りを思えば、今、主にあって死ぬことは幸いです。それから、死んだ後にある安らぎがあるので幸いです。ヘブル4章11節には、「この安息に入るように努めようではありませんか。」とあります。

そして興味深いのは、「彼らの行いが、彼らとともにいて行くから」幸いだということです。自分のしていることが報われたということを知っているということは、魂に安息をもたらします。私たちは、報いを期待してはいけないと教えられますが、しかし、それは報いそのものがないことを意味していません。天において宝がある、つまり報いがあるのです。だから、地上で報いを期待しなくてよい、という意味です。愛による奉仕には、大抵、報いが見えません。なぜ、主にあって行っているこれらのことが、何の成果も出していないように見えるのか？と思われるでしょう。ヘブル書6章10節にはこう書いてあります。「神は不公平な方ではありませんから、あなたがたの働きや愛を忘れてたりなさいません。あなたがたは、これまで聖徒たちに仕え、今も仕えることによって、神の御名のために愛を示しました。」主が忘れていないと言われます。こういった報いが、死後に殉教した聖徒たちに与えられ、それが彼らの魂の安息に寄与します。

### 3A 主の刈り取り 14-20

そして次に、主が裁きを行われる時、それが再び地上に来られる時であることを、収穫の喩えで語られます。

#### 1B 穀物の実り 14-16

<sup>14</sup> また私は見た。すると見よ。白い雲が起り、その雲の上に人の子のような方が座っておられた。その頭には金の冠、手には鋭い鎌があった。

「雲の上に人の子のような方が座っておられ」る幻ですが、これは、ダニエル書7章に出てくるものです。「7:13 私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲とともに来られた。その方は『年を経た方』のもとに進み、その前に導かれた。」そして、大祭司カヤパの前で、イエスがここの箇所を引用して、ご自身がキリストであることを告白しました。白さは、清さを示しています。雲は神の栄光を表しています。

そして、この方には「金の冠」が頭にありました。冠には王冠と、勝利と救いをもたらした者に与えられる冠がありましたが、ここでは後者です。ローマ皇帝も、王冠ではなく、勝利によって人々に救いをもたらしたことで、選手たちが賞を受ける時と同じ、月桂樹の冠をしばしばかむりましたが、それと同じです。主が、敵に勝利し、救いをもたらしました。「金」は、神の栄光を表しています。

そして大事なのは、この方が、「鋭い鎌」を持っておられます。収穫のための鎌ですが、これによって裁きを行われるのです。「鋭い」というのは、その裁きが曇ることなく、はっきりと行われ、容赦がないことを示しています。

<sup>15</sup> すると、別の御使いが神殿から出て来て、雲の上に座っておられる方に大声で叫んだ。「あなたの鎌を送って、刈り取ってください。刈り入れの時が来ましたから。地の穀物は実っています。」<sup>16</sup> 雲の上に座っておられる方が地上に鎌を投げると、地は刈り取られた。

私たちが、刈り取るという言葉を知るとき、魂の救いの収穫のことを思います。主が、収穫のために働き人のために祈りなさいと言われたからです。けれども、聖書ではそれだけでなく、悪い実を結ぶ者たちに対する裁きの時にも表れます。午前礼拝で言及しましたが、マタイ 13 章の毒麦の喩えです。その解き明かしを主がしておられます。

<sup>37</sup> イエスは答えられた。「良い種を蒔く人は人の子です。<sup>38</sup> 畑は世界で、良い種は御国の子ら、毒麦は悪い者の子らです。<sup>39</sup> 毒麦を蒔いた敵は悪魔であり、収穫は世の終わり、刈る者は御使いたちです。<sup>40</sup> ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそのようになります。<sup>41</sup> 人の子は御使いたちを遣わします。彼らは、すべてのつまずきと、不法を行う者たちを御国から取り集めて、<sup>42</sup> 火の燃える炉の中に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。<sup>43</sup> そのとき、正しい人たちは彼らの父の御国で太陽のように輝きます。耳のある者は聞きなさい。

良い麦は、主人の倉に納められますが、それは御国の中に入って報いられることを意味しています。悪い麦は、火の地獄に投げ入れられることを意味しているのです。バプテスマのヨハネがすでに、宣言していましたね。「マタ 3:11b-12 その方は聖霊と火であなたがたにバプテスマを授けられます。12 また手に箕を持って、ご自分の脱穀場を隅々まで掃きよめられます。麦を集めて倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます。」

そして、御使いが主ご自身に、刈り取ってくださいと宣言していますが、それは「地の穀物は実っています。」ということなのです。これは、御使いが見ても、あまりにも明らかに実っているからなのです。午前礼拝で話したように、実が乾いているというのが、直訳です。ですから、もう遅すぎると思えるほど、彼らの悪事が明らかなのです。ですから、主がずっと待っておられたのですが、もはや遅くなることなく、すみやかに裁かれるのです。

2B ぶどうの踏みつけ 17-20

1C すでに熟したぶどう 17-18

<sup>17</sup> それから、もう一人の御使いが天の神殿から出て来たが、彼もまた、鋭い鎌を持っていた。<sup>18</sup> す

ると、火をつかさどる権威を持つ別の御使いが祭壇から出て来て、鋭い鎌を持つ御使いに大声で呼びかけた。「あなたの鋭い鎌を送って、地のぶどうの房を刈り集めよ。ぶどうはすでに熟している。」

天において神殿があります。主なる神が座しておられる神殿です。そこに仕えている御使いの一人が、イエス様と同じように鋭い鎌を持っていました。そして、「火をつかさどる権威を持つ別の御使い」が出て来ています。神殿の中に、その外には祭壇がありますね。それは火でいけにえを焼くところであり、ここでは神の裁きを表しています。ですから、火をつかさどる権威を持っています。

そして、再び、刈り集めるように呼びかけています。今度は、「ぶどうの房」の刈り集めです。先ほどは、麦の刈り集めだったと思います。穀物が乾いているからです。ここは、ぶどうの房です。そして、時がもう満ちていることを、「すでに熟している」という言葉で言い表しています。熟しすぎて、はちきれんばかりになっている、ぶどうです。

## 2C 踏み場から流れる血 19-20

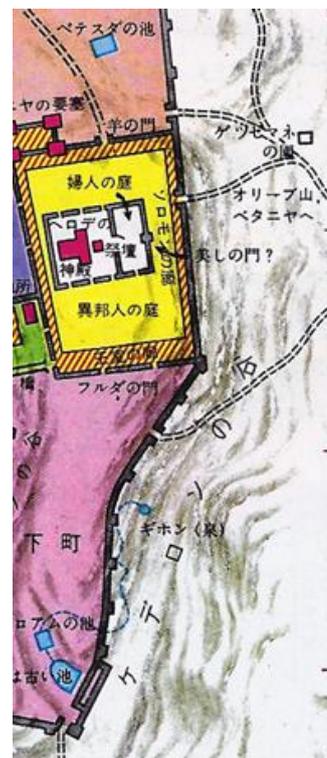
これは午前礼拝で話しましたが、続きがすごいです。

<sup>19</sup> 御使いは地上に鎌を投げて、地のぶどうを刈り集め、神の憤りの大きな踏み場に投げ入れた。

ぶどうの実を収穫して、それを酒ぶねの中に入れて、それからぶどうの汁を取ることは、イスラエルの中ではありふれた光景でした。今もイスラエルに行けば、いたるところに、酒ぶねの遺跡が残っています。平らな岩のところ、かさのとても浅い風呂のように削って、その平らなところで、足踏みをして汁を出します。種が潰れると汁に苦みが入ってしまうので、それなりの体重の人でないと上手に踏めないのだそうです。若い女性がそれで好まれます。男だと、体が重すぎて種も潰してしまうからです。主は、そういった光景を用いられて、その足踏みする姿を、ご自身が彼らと戦われて、踏み潰されることを表わしておられます。

<sup>20</sup> 都の外にあるその踏み場でぶどうが踏まれた。すると、血がその踏み場から流れ出て、馬のくつわの高さに届くほどになり、千六百スタディオンに広がった。

主が、「都の外」で国々を裁かれます。そして血が流れ出ます。これだけを読むと、よくわからないと思います。この姿は、ヨエルの預言の中に語られていました。「3:12-14 諸国の民は立ち上がり、ヨシヤファテの谷に上っ



て来い。わたしがそこで、周辺のすべての国々をさばくために、座に着くからだ。」13 鎌を入れよ。刈り入れの機は熟した。来て、踏め。踏み場は満ちた。石がめはあふれている。彼らの悪がひどいから。14 判決の谷には、群衆また群衆。【主】の日が判決の谷に近づくからだ。」主が戻って来られる時、オリーブの山に向かわれます。その時に、ヨシャファテの谷で、裁かれるとあります。ヨシャファテの谷とは、神殿のあるモリヤ山と、東のオリーブ山の間にある、ケデロンの谷の部分です。ここで、国々をぶどうの踏み場に入れられて、血が流れるのです。

主が戦われて、彼らが殺されて、それで血が流れていくのですが、それが「馬のくつわの高さに届くほど」になります。非常に生々しい光景ですが、主が、諸国の軍隊を倒されることは、旧約聖書の預言書に、また黙示録 19 章に詳しく描かれています。そして、なんと「千六百スタディオン」にまで及びます。296 キロメートルです。

この距離は何なのでしょう？ イスラエル全土を示す、ダンからベエル・シェバが、その距離だという人たちがいます。けれども、300 キロメートルより短いです。イザヤ書 63 章の預言を見ると、エルサレムからボツラではないかと思われま

1 「エドムから来るこの方はだれだろう。ボツラから深紅の衣を着て来る方は。その装いには威光があり、大いなる力をもって進んで来る。」「わたしは正義をもって語り、救いをもたらす大いなる者。」2 「なぜ、あなたの装いは赤く、衣はぶどう踏みをする者のようのですか。」3 「わたしはひとりでぶどう踏みをした。諸国の民のうちで、事をともにする者はだれもいなかった。わたしは怒って彼らを踏み、憤って彼らを踏みにじった。彼らの血の滴りはわたしの衣にはねかかり、わたしの装いをすっかり汚してしまった。4 復讐の日がわたしの心のうちにあり、わたしの贖いの年が来たからだ。5 見回しても、助ける者はだれもなく、支える者がだれもないことに呆然とした。それで、わたしの腕がわたしの救いとなり、わたしの憤り、それがわたしの支えとなった。6 わたしは怒って諸国の民を踏みつけ、わたしの憤りをもって彼らを酔わせ、彼らの血の滴りを地に流れさせた。」

イエスが再臨される時に、まず、荒野に逃げている、ボツラに逃げている、イスラエルの残りの民を救われます。その時に、彼らを滅ぼそうとして集まって来た諸国の軍隊と戦われます。そして、そのボツラから、ハルマゲドン、つまりイズレエル平野にあるメギドまでが、おおよそ 300 キロメートルなのです。ハルマゲドンに集結した軍隊がボツラに行く時に主が戻って来られて、それで彼らが倒れる領域がこれだけ広範囲になり、そしてイエスが残りの軍隊をヨシャファテの谷で裁かれて、それで血が溢れに溢れるということなのでしょう。

このように、主は必ず裁かれます。今、14 万 4 千人の贖われる者たちのように、私たちが贖われた生活をしているか？ 子羊に献げているか？ それとも世を愛しているのか？ と迫られます。